

人々の犠牲の上に

満州引揚げの体験から

富山県 高田 信子

早いもので終戦後五十年が過ぎようとしております。命からがら満州より引き揚げてきた時のことが、昨日のように思い出されます。

私の主人は独身のとき、先遣隊として満州の開拓に行きました。家族召致ということで実家に帰って来たとき、私と縁談がありました。私の父も富山県西礪波郡の郡農会から、満州の開拓団の勤労奉仕という形で、満州に一カ月ほど行っていたことがあり、「とても広い所で土地も肥えていい所だ」と話しておりましたので、私は行ってみたいと思っていました。けれども母は、私が七人兄弟の一番上だったのと、あまりにも遠い所なので反対でした。

私は、どうせのことなら広い所へ行って、一生懸命

働きたいと思いつきました。

昭和十六年の三月数え年二十歳のとき、「大陸の花嫁」と言われて満州へ行くことになりました。出発の間際まで母に、「どうしても行かんらんのか」と言われたのですが、若かったので、「言ってくるよ」と言って、希望を持って主人と新潟から船に乗り、朝鮮の羅津港に着き、今度は汽車に乗り、ハルビン（哈爾濱）の少し南の五常（つごう）まで行きました。北満の方に近づくに従って、汽車の中にはニンニクと何かが混じったような、嫌なおいが漂ってきて、こんなに臭くてひどい所へ行くのかな、とだんだん心細くなってきました。

五常に着くと大きな黒豚や、白豚が野放しになっていて、びっくりして、ふと、どうしてこんな所まできたのだらうと思いましたが、主人に付いてきたのだと思ひ直し、五常の開拓団の連絡所に行きました。今になってみると親の心を少しも分かっていなかったのだなと思います。三月の中ごろでもまだ土が凍っていて本当に寒く、そこには防寒コート、防寒靴が用意して

あり、そこで着替え九十キロぐらい離れた沖河（チヨンホー）の開拓団まで行きました。前からきていた奥さん方が、ノロという野生の鹿をスキヤキにして「よききた」と言つて歓迎してくれました。

主人が本部勤務だったので、しばらく本部の中で、一軒の家に二家族入つて暮らしました。初めて見るオンドル、ペチカ、何もかもが驚きでした。薪で火を焚くのに、煙にむせながら一生懸命でした。電灯がなくランプでした。ランプの火屋が煤で黒くなるので、毎日掃除をするのが日課でした。初めはよく壊しましたが、この生活にもだんだん慣れてくると不自由とは思わなくなりました。満州の冬は寒さが厳しく、雪が粉のようになつてふぶくので、地面にはあまり積もりませんでした。

本部の馬小屋にたくさん馬がいます。若い男の人たちが馬草をやつたり、馬小屋の掃除をしたりして働いています。私は馬をそばで見るのが初めてで、何か大きな体で恐ろしくて、そばへ行くことができませんでした。主人が「馬はかわいい動物だ。何も怖がるこ

とはない」と言つて一頭、一頭、バケツに水を入れて飲ませていきます。私にも手伝うようにと言われ、心をきめて馬のそばへ行きましたが、やつぱり恐ろしくて水を飲ませることができません。そこで考え、長い棒の先にバケツをしばつて、そつと馬の前に出してみたら、馬が長い棒に驚いたのか「ヒヒン」と鳴いて棒立ちになりました。私は恐ろしくてそのまま逃げ出して、みんなに笑われました。失敗つづきでしたが、だんだん慣れてくると馬も牛も豚もともかわいい動物でした。

私たちの開拓団は、二十軒ほどが集まって、一つの部落がつくられました。後に人が増えてきて、第一部落（城端区域、福光区域）で福城と言ひ、第二部落（東礪波郡、下新川郡、射水郡、婦負郡、福井県、石川県）で東曲と呼びました。第三部落（石動区域、水見区域）を石見と呼ぶ。第四部落（福岡区域、戸出区域）を福戸と呼び、第五部落「津沢区域」を津沢と言ひ、第六部落「平村」を「平」と言ひ、第七部落「上平村」を「上平」と言ひました。

私は、第五部落でした。それぞれの部落は八キロほど離れていて、その間は馬で行き来し、満州人（私は満人と言っていました）部落、朝鮮人部落も所々にありました。初めは治安が悪く、夜になると匪賊が出て、サイレンが鳴ると、皆部落の集会所に避難しました。第五部落の周囲には城壁があり、男の人たちは交代で城壁のある所に鉄砲を持って警備に行きました。

私たちの生活は、最初一年余りは共同生活で、その後は個人の家を持ち、暮らしました。米は団より自由に分けてもらえる。そのほかはすべて各家自給自足で、様々な家畜を飼って女はそれらの世話をし、子供を育てて男の人たちは木やレンガの家を建てたり、畑で働いたりしました。本当に広い所で、地平線まで畑が続いていました。土地は肥えていて作物は良く育ちました。五月ごろになると氷が溶けて春になり、日本では見られない、青く澄み切った高い素晴らしい空になります。私は実家から生活用品も送られてきて、主人や近所の人たちに助けられ、一時の不安も消えていき、日本に帰りたいとは思いませんでした。昭和十七年に

は長女も生まれ、苦しかったこともありましたが、楽しい生活でした。

開拓団の近くの満人たちは非常に貧しく、物もなく軍足（軍隊用の靴下）の一足でもあればひどく喜んで、日本人をうらやましがっていました。お金で嫁を買うので、お金のない人は嫁をもらえなくて、一枚の布団を担いで、どこへでも移動して行く人もありました。主人は満人をおかわいがっておりましたので、「先生、先生」と言つてよく家にきました。すると、主人が「お茶を飲ませてやんなさい、……物をあげなさい」と言っておりました。

昭和十九年になると開拓団の中からも、召集されるようになり、六月に主人も召集されました。召集を受けてから二カ月間、余裕がありましたので、畑は満人に任せ、田んぼは朝鮮人に任せ、後の私たちの生活の段取りをして出征しました。満人が主人の姿が見えなくなつたので、「どうしたの」と聞きにきたので、「内地へ行ったの」と言ったら、「内地はよいね、お父さん、お母さんいるんでしょう」と言っていました。

次から次へと男の人たちが召集され、部落にいる者が女と子供と年寄りだけになると、出征したことが満人にも分かってきました。家の中のをぞきにきたり、動物でも人気がないのが分かるのか、夜中に狼の吠える声が近くで聞こえ、だんだん危なくなってきたので、部落の世話をしていたおじいさんが、「女も鉄砲の稽古をせんらん」と言つて、毎日二時間ほどずつ鉄砲の稽古をしました。いつも枕元には鉄砲と銃弾五十発を置くという、そんな生活が続きました。その間に長男が生まれ、昭和二十年四月二日、父親の顔も見ずに六カ月で亡くなりました。あとでわかったのですが、主人の隊が満州から日本に向かって、移動した日だったそうです。

昭和二十年八月十七日、急に、「集会があるから集まってくれ」と連絡があり、「おかしいな、何だろう」と言いながら集会所に行きました。部落の世話をしていたおじいさんが、皆の顔を見て、「あんたらびつくりするな、日本が負けた」と言われ、本当にびつくりして、我が耳を疑いました。「日本が負けたなんて

……こんな所で日本が負けたらどうなるんだろう」と言つて皆泣きながら、「どうせ死ぬなら最後までここでがんばろう、ここで死のう」と言い合っていたところ、おじいさんに、「あんたら、死ぬのはいつでも死ぬ。何か団の命令があるまで絶対に早まってはならん」と言われて、団の命令を待ちました。すると、団の方から五常まですぐ避難するようにと命令が出たのです。そこで一週間ほどの食料と手回り品だけ持つて、子供をおぶつて家を離れることになりました。

かわいがつてきた牛や豚、山羊、鶏など皆すきな所へ行けばよいと思ひ、戸を開けてやりましたが、別れがわかるのか、小屋中をぐるぐる回つて出て行かないのです。胸がしめつけられる思ひでした。

満人の中には、この時とばかり、まだ家の中に人がいるのに、縁先にきて物を取つて行く人もいましたが、私たちは仲良くしておりましたから、そばにきて見ていただけで何も取つて行きませんでした。「長い間お世話になったから、みんな持つていってね」と言つて出てきたほです。家を燃やしてきた人もいました。

八月十九日に団の本部に集まって、それから五常に向けて女、子供の長い行列ができました。行列から離れると満人に連れて行かれてしまいますので、離れないように歩きました。第一部落の近くまできたとき、団長さんが「今、一部落全員自決した」と言われてびっくりしました。作業場で全員正装して自決されたそうですが、衣類はみんな、だれかに剥がされてしまっていたそうです。

「私もいつ死ぬかわからんけれど、行ける所まで行こう」と皆で励まし合い、作業場と共々遺体を燃やし、お骨も拾わずにすぐ出発しました。そこへ第一部落の男の人たちが帰ってきたのです。自分の妻子や家を思つて走つてきたときには、もはや死んでいました。自決した三時間ほど後のことでした。その男の人たちが加わり心強くなりました。私たちは銃を持っていたので、満人も遠巻きにしているだけで、何もできないでいました。

雨が降つてくると地面が沼田のようになり、膝まで埋まり、泥だらけになりました。そのような中でも

「女、子供、全部連れて行かんらん」と言つて、孤児を残さないようにと、男の人は自分の子供をおぶつて、親のいない子供の手を引っ張つて、無理やりにも連れて行つたのです。病人や妊婦は馬車に乗せ、その馬車が泥沼で足を取られて倒れ、馬車が使えなくなると病人を担架に乗せ、もう本当に苦勞して、五常に向かつて一生懸命歩きました。

馬車の上でお産をした人がいました。産婆さんはもちろんいませんので、知っている人が取り上げ、そのままタオルにくるんで抱えてきましたが、五常でその子も母親も亡くなりました。その後、ほかの兄妹も亡くなりました。

一週間ほどかかつて、ずぶ濡れになりながら五常に着きましたが、避難民でいっぱい、どこかの宿舎に入るか決まらないのです。その間にも、鉄砲を持った満人に襲われ、私は飯盒一つ残して、持っているものは全部失くなつてしまいました。最後の最後になつて、木や窓枠など燃える物は何もなく、レンガだけが残っている、元日本人の農学校があり、そこにもすでにた

くさんの避難民がいましたが、雨露がしのげるので、各部落ごとに分かれて、そこに入れていただきました。

そこに入ってから、五常に駐屯していた中国の軍隊の一部の兵隊たちが、鉄砲を持って昼夜を問わず、若い女性を求めてやってくるようになり、私たちは恐怖におののきました。女性は重病の振りをしたり、頭を坊主にして顔に炭を塗り汚い恰好をし、男のような姿をして隠れましたが、それでも発見されて連れて行かれる人もいました。私たちはやつとのもので、軍の上官に訴えることができませんでした。それから間もなく、その兵隊たちのリーダーが捕まり、その人は見せしめのために、よく見える小高い丘で処刑されました。その後、一切そのようなことは起こりませんでした。

私たちの開拓団の中には、男の人が戻ってこられた部落もあり、元の開拓団には作物があると言う話を聞いて、話をつけて開拓団に戻って、そのまま住む人もおられました。

私はそんなとき、急に下痢をして便所で倒れてしまい、気が付いたら高熱を出して部屋で寝ていました。

薬はもちろんなく、みみずの干したのが効くと聞きましたが、干す暇がなく、生のみみずをそのまま飲んでみたり、馬の爪を削って飲むと熱さましになると聞いて、それも飲んでみましたが良くならないのです。元の開拓団に戻るといふ男の人が、私の姿を見て、「この人も連れて生きたいが、この病気ではね……」と書いていました。どうしようもなく、私は命がないかもしれないと思いましたが、子供を何とかして日本に連れて帰らねばならないと思ったその時、一番先に母の顔が浮び、横にいる人の姿が母に見え、涙が流れて涙が流れて、それから熱が下がっていったのです。

生活が今までと反対になり、満人は、日本人を使うのがうれしくて、生活が豊かになった満人は、毎日仕事の勧誘にきました。私たちは、働かないと食べていけないので、「そんならあんだ、お金いくらくれる、白いご飯を食べさせてくれるか」と聞いて、まだ熱があつてふらふらしながらも、一人では危なくて行かないので、一番条件の良い所へ、五、六人で働きに行きました。仕事は炊事、洗濯、畑仕事、煙草巻きなど

で、もらったお金だけでは、米が高くて買えないので、粟や高粱を買うのが精いっぱいでした。安い岩塩を買ってきて溶かしておつゆ代わりにし、満人の畑に残った菜っ葉や小さいじゃがいもを拾ってきて、大きい鍋で炊き、皆で食べました。

寝るときは毛布一枚もあればいい方で、寒いときは南京袋を重ねて、足を合わせ体を寄せ合って寝ました。伝染病だと思っても、皆一緒の所で暮らすほかありませんでした。私の体の具合はそのときは治っていましたが、部屋は二十人余りいて、皆、次から次へと熱を出して苦しんでいました。私が働きに行っている間、子供を預けていった四十歳ぐらいの友達が、急に苦しみ出し、吐いて吐いて、そのまま亡くなってしまいました。次から次へと周りの人が亡くなっていくので、体の力がなくなっていくような気がしました。仕事に行かないで、粟のお粥を作って看病したこともありましたが、葉はもちろん、食べる物さえろくに無いのです。食べ物がないと、皆餓死してしまいますので、病人を置いて働きに行きました。私のお世話になった人

たちも、老人、子供も次々と死んでいきました。冬は火葬しようにも燃やす物がなく、遺体は一つの所に固めて上から物をかぶせて置いてありました。

私たちが満人の所に働きに行くと、「かわいそうに、あんたらね、何にも悪くない。日本の軍閥と財閥が悪いのだから、あんたたち私らと一緒や」と言って、子供たちにお菓子や靴をくれたり、着る物をくれたりして、大変親切にしてくれました。満人にそのようにして助けられました。残留孤児の人が助けってもらったのも、このとおりなのだと思います。本当に優しい人たちがおられました。

五常では一年余り生活をしました。昭和二十一年の八月の終わりがら、長い避難生活が終わって引揚げが始まりました。開拓団へ戻って生活していた人たちも、引揚げのために五常へ帰ってきました。けれど、出発までの一週間ほどの間に、多くの人が伝染病にかかり、私が、「あんた早く元気になって、一緒に帰ろうよ」と言っていた人たちも次々と亡くなられました。引き揚げる多くの人の中には、病気で動けない

人、子供を一人置いて行く人、主人が死んでしまつて母子共に残留する人…、本当に地獄の中から引き揚げてきました。その状態の中で私たちの沖河開拓団では、一人も子供を残さず帰つてこられたことを思うと、本当に何と感謝していいかわかりません。汽車と言つても、屋根はなく台だけで、横板があれば良い方でした。皆貨車の横から落ちないように、男の人たちが縄で人を台に縛りました。ゆるゆると動く汽車に乗り、五常駅を離れ、南下し、錦州省のコロナ島から引揚船に乗つた。四十日ほどかかつて博多に着きました。その途中でも毎日、毎日、病と栄養失調で亡くなつていく人がおられました。

私は実家に帰るまで、主人がどうしているのか全然分かりませんでした。主人は満州で入隊し別れてから、その後、九州へ帰つてきて終戦を迎えたため、割に早く実家に帰つてきており、一年以上も私たちが生きていくかどうか心配しながら、待つていてくれたのでした。私は本当に幸せだと思ひます。

母は、私たちが死ぬはずがないと心に言い聞かせて、

仏壇に陰膳を供えて、帰つてきたときのためにと着物をこしらえて待つていてくれました。この話を聞き、親不孝をして本当に申し訳なかったとつくづく思ひました。

昭和二十五年、私は六カ月で早産し、その後、体の具合が悪く医者に通つていましたが、思わしくなく何年も苦しみました。

昭和三十二年、主人の姉に導かれて今のご法に入りました。高岡支部の鈴木先生に、先祖供養の大切さを教えられ、また、自分の前世因縁も出され、お経を上げさせていただいているうちに、病気がうそのように良くなりました。支部長が代わられて、新倉先生に「自分が無事に満州から帰つてこられたのは、亡くなった人たちの犠牲の上にあり、その人たちの供養をさせていただくように」と教えていただきました。満州でお世話になったり、一緒に苦労して亡くなった人たちに對する思いやりがなく、自分さえよければ…という気持ちがあつたことを本当に恥ずかしく、今更ながら目の覚めるような思いをして、おわびをさせていた

だきました。戦争犠牲者や、満州引揚げの際の犠牲者たちの供養をさせていただくようになりました。

それからしばらくして、先生より満州から引き揚げてくるときに犠牲になった霊に、法名を付けて供養するようにとのご指導がありました。先生が沖河礪波ちがわ開拓団犠牲一切の霊、第一部落四十三人の霊、お世話になった家畜一切の霊の三体の法名をつけてくださり、塔婆を申請しました。角塔でその霊たちにおわびと礼のお経を上げていると、当時のことが浮かび上がり、日本に帰りたくても帰れずに死んでいった人たちの苦しみ、思いが込み上げてきて涙が止まらず、お経が続けられないほどでした。私の供養を霊たちが受けてくださったのではないかと思ひ、本当にうれしくなりました。

昭和四十九年ころ、主人と「開拓団にいた人たちはどうしているのだろうか。一度、皆で集まろう」という話になり、いろいろな関係者に問い合わせ、当時の第一から第七部落までの、全国各地に散らばっている人たちの住所を調べ通知を出し、高岡に集まりまし

た。約三十年ぶりの再会に感激し、抱き合って泣きました。そのときに、「開拓団の犠牲者の慰霊碑を建てたい」という話を持ち上がりました。

富山県内ではいくつもの開拓団があります。私たちの開拓団の代表や、ほかの開拓団の人たちやいろいろな方面にその話をし、慰霊碑建設の話が本格的に計画されました。有志の者は寄付をさせていただき、昭和五十一年八月十七日に、富山の護国神社に、富山県満蒙開拓団の拓魂碑が建てられました。それからは、毎年八月十七日に護国神社で慰霊祭が行われております。私たちが団の世話役をしておりますので、毎年、皆に通知を出しますが、戦後五十年ともなると、亡くなられたり病気で来られなくなったりして、一年、一年集まる人たちも少なくなり、寂しいものです。開拓団の人たちが亡くなられると、その知らせが私の家にきます。近い所は行き、遠い所は弔電を打っております。今後も、その方たちの供養をさせていただき、皆の世話も一生懸命続けさせてもらいたいと思っております。私は先祖のお守りと、犠牲になった人をはじめ、いろ

いろいろな人のお陰でこのように元気であることができるのだと思うと、こうして供養をさせていただき、皆のお世話をさせていただくのも、私の役目だと思います。

三人の子供たちも皆独立して、何の心配もなくなつた昭和六十年ころから、主人と中国へ行って見たいね、沖河や五常はどうなっているだろうか、と話をしておりました。でも再び行けるとは思っていないませんでした。

昭和六十三年の正月、福岡町に嫁いでいる娘から、今、近所に中国国際旅行社から、東京にきていらつしやる王さんと言う人が遊びにきておいでだから、満州の話でも聞きにきたらと電話があつたので、懐かしい満州の話でも聞いてくるか、と主人と出かけました。若いハンサムな王さんは、日本語の上手な立派な人でした。福岡町の人たちが中国へ行かれたとき、世話になった人だそうです。いろいろ話がはずんで、一度ハルビン、五常の方に行つてみたいと言う話をしておりますたら五常の方に行かれるようになったら、いろいろと力になりたい、一年間、東京にいるから、と電話番号を書いてくださいました。行けるなんて夢だと思

つていました。

団員だった山田三郎さんの息子さん、家にたずねてこられ、父も母も年をとつたので、今のうちに満州へ連れて行きたいと思つているが、団の中で行く人はいないだろうか、と相談にこられました。日本の旅行社の方に聞いてみたら、ハルビンまでしか行けないと言われたそうです。沖河同友会の皆さんに話をしてみることになりました。行つて見たいと思つていても、いざとなるといろいろのことので決心ができなくなるものです。

十人ほどの人たちが行つて見たいと言うことになりました。沖河は無理でも、五常まででもと言う話になりました。東京においてになる王さんに聞いてみることにして、娘の家に話をしたら、偶然にも用事で福岡町にきていらつしやるのとので、すぐ山田さんの息子さんと三人で会いに行きました。王さんは大変喜ばれ「私の親しくしている、日中国際旅行社の社長に話をしてお願いしましょう」と帰って行かれました。話は、とんとん拍子に進み、〃びょうたんから駒〃とは

このことかと驚きました。子供たちも今なら大丈夫。二人で行ってきたらと言ってくれるし夢のようでした。主人も肝臓を悪くして、入院したりしている体なので、お医者さんに相談しましたら、「一週間ぐらいなら大丈夫。薬をたくさん持つて来しんできなさい。帰ってきたら話を聞かせてください」と、言われました。

日中国際旅行社の三俣社長が案内してくださると言うので、昭和六十三年七月六日に出発しました。山田さんのお母さんは出発五日ほど前に病気になり、行かれませんでした。一行は、山田三郎さん、山田三和さん、細田初雄さん、山田米次郎さん、大浅清作さん、大浅文三郎さん、高田義信、高田信子の八人でした。沖河まで行けるなんて、夢を見ているような気持ちでした。主人の体を心配しながら汽車に乗りました。

まだそのころ、中国に残っている友達が六人おられるので、会えるのを楽しみにしておりました。三俣社長の案内で北京の天安門広場、明の十三稜、万里の長城を見物させていただきました。中国国際旅行社哈爾濱分社の人たちの案内で、ハルビンから車で五常へ行

きました。途中、道のぬかるみに一台の車が落ち込んで、二時間も三時間も動かなくなったり、日本と違って中国の人は、のんびりしています。夜、やっと五常に着きました。旅館ではいろいろもてなしてくださいました。

五常の町は昔の面影はほとんど見られません。大きな建物が並び、城壁もなくなり、広い道路が続いています。五十年も過ぎたのだから――

昔あった日本人農学校もわかりません。

五常県人民政府に表敬訪問させていただき、戦前にいろいろお世話になったことをお礼申しました。よくきたと心よく迎えてくださいました。いろいろと話したあと、多くの人たちが亡くなった元日本人農学校はどうなっているか、と聞きました。知事さんが昔のこととわからないから、何とか調べて見ましようと言って調べてくださいました。今、農学校跡には工場があり、戦後は日本人が訪れたことがないので危ないからと、車一台に四人ほどの人が、先導してくださいます。広い道路になり、周りも変わって昔の面影はあり

ませんでした。隅の方に昔の建物がそのまま少し残っており、ほんとに懐かしく、多くの人たちの亡くなった場所、その当時のことが走馬灯のように浮かび、胸がいつぱいになり、涙がとまりませんでした。どんなにか皆待つておられたことだろう。と周りもかまわず泣きました。家を出るときに、五常に行けたらと思いい水筒に水を入れて持つてきたのを思い出し、日本の水ですよ、と泣きながらまいてきました。そのとき、その場所の砂を袋に入れて日本に持ちかえり、少しずつ皆さんに分けました。

五常県人民政府の人たちの先導で、沖河まで入っていただき感謝しました。昔と大分変わって畑が少なく、水稲が多く作られています。道路も広くきれいになっていました。

帰国しないでまだ、沖河に残っていた友達が六人おりましたが、三俣社長の計らいで連絡してくださいましたので、皆さん首を長くして待つていてくださいました。皆、だき合つて涙を流し夢のようでした。帰るのが遅くなるので、身を切られるような思いで別れて

きました。その後、日本に里帰りされるようになりましたが、今、皆さんは日本に引揚げてきて、大阪に住んでおいでのようです。有り難うございました。

【執筆者の横顔】

富山県高岡市で農業を営む太田義栄氏の七人兄弟の長女として生まれた信子さんは、高岡裁縫女学校を卒業して家事の手伝いをしていたころ、地区から満州開拓の先遣隊として出ておられた独身の青年、高田義信氏が家族召致と言うことで帰国しておられたのと、信子さんとの縁談があつた。母は遠い満州では反対だったが、信子さんの進取の気性に応じた母は、満州開拓に働く高田青年に魅せられて結婚を諾された。信子さんは昭和十六年三月、二十歳で結婚し、広漠たる満州に渡り、十七年には長女明穂の出生をみた。

昭和十九年六月、開拓団から召集者が出て御主人ともども応召となった。十九年十一月長男を出生したが、翌二十年四月亡くなった。悲しみの二十年八月十七日に日本の敗戦を聞く信子さんは長い間世話になった近

所の満人を呼び寄せて、「高田家の家財道具みんな分配して仲良く暮らしてください」と言い残し、避難する。

第二部落は全員自決していた。開拓団から五常まで団員の長蛇の列。一週間ずぶ濡れになりながら五常までついた。途中、暴民から襲撃をうけ略奪、暴行に遭う。全く着の身着のままの非情の状態で五常に一年余の生活をする。

二十一年八月から引揚げが始まった。病気で動けない人、子供をおいていく人、主人が死んで母子ともに残留する人、本当に地獄の中から引き揚げた信子さんなのである。五常からコロ島まで四十日以上かかって博多に着いた。この四十幾日かの引き揚げ途中、毎日毎日亡くなっていく人がいた。

御主人の高田氏は満州で召集し、九州に戻り、終戦を迎えたので、一年以上も家で心配しながら信子さんの引揚げを待っており、喜びは言語に絶するものだった。

現在老いてなお、御主人と信子さんは幸せな生活を

送っておれる。「人に与えるときは心身から湧き出る淡々たる気性」の信子さんである。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

苦しみの中の最高の人生

富山県 小 桜 トミ子

私は下新川郡入善町新屋の農家に十人兄弟の七番目として生まれ、幼いころより体も小さく、小心者でしたが、親兄弟思いは大きく、勉強、家の手伝いは親を安心させるためがんばったつもりです。両親は子供に對してとても厳しくまた優しく育てられ、兄弟げんかをした記憶はありません。学校を卒業すると我慢強い人間にするため、親は会社に勤めをする前に必ず他人の家へ奉公に出しました。私は東京の個人会社で十八人家族の家事一切のお手伝いに行かされました。

昭和十二年、父親が亡くなり、帰ってきて初めて入